

海を渡った日本文化 —活躍する女性たち (その1) —

会員 寺澤行忠



(2017年10月
明石書店刊)

私はここ10年ほど、「海を渡った日本文化」という研究テーマで海外を歩いてきたが、日本の文化が一般の多くの日本人が想像する以上に、広くまた深く受け入れられている現状に、驚かされるものがあった。その具体的な状況は拙著に詳述したが、海を渡った日本文化の中からいくつかのテーマに沿って、簡単に紹介してみたい。

日本の文化が海外に受け入れられるについては、日本の文化そのものに優れた価値があることによるものであることは言うまでもないが、その背後には、それを紹介する多くの人々の努力があることを忘れるわけにはいかない。

東京にあるドイツ日本研究所の第2代所長で、ヨーロッパ日本研究協会会長なども歴任したベルリン自由大学のイルメラ・日地谷＝キルシュネライト教授は、1993年から2000年にかけて、日本文学のドイツ語訳シリーズ、「日本文庫」32冊を刊行した。すべての本が、女性である同教授の見識によって選定され、従来ドイツへの紹介が遅れていた女流作家も多く取り入れられている。ライプニッツ賞、ドイツ連邦功労十字章、日本の旭日中綬章などを受賞している。

芥川賞作家で詩人の多和田葉子氏は、1982年に渡独、ハンブルクやベルリンを拠点に、ドイツ語と日本語で小説を書いている。ドイツ語でも20冊以上の小説やエッセイ集を執筆しており、その文学活動に対し、2016年にドイツの権威ある文学賞であるクライスト賞が贈られた。

フランクフルトでは、銀行家として実業界で活躍するゲルハルト・ヴィースホイ氏の夫人であるヴィースホイ・小野由美子氏が、裏千家フランクフルト協会の会長を務めている。自宅に立派な茶室を持ち、時には広い庭で野点をする。茶人としてのみならず、フランクフルト国際婦人クラブの会長として、夫君とともに日独親善に貢献している。



ヴィースホイ・小野由美子氏ご夫妻と筆者

同地の日本語普及センターでは羽田・クノーブラオホ・眞澄氏が事務局長を務め、ドイツ人に日本語を、日本人にドイツ語を、200人以上に教えている。語学のみならず、日本の行事の紹介、コンサート、講演会など多数のイベントを催し、フランクフルトにおける日本文化紹介のセンターとして、文化交流にも力を入れている。また近年はわがJDGYと協力し、作文コンテストで優秀な成績を収めた者を相互に招きあっていることは、ご承知のとおりである。

ハイデルベルク大学のメラニー・トレーデ教授は、ドイツではきわめて少ない日本美術の専門家で、ドイツの日本美術史学をリードする。門下生は、ドイツ各地の美術館の日本美術部門で、キュレーターとして活躍している。

デュッセルドルフ大学の前みち子教授は、金沢の出身で、文学、比較文学、ジェンダー論を専門とする。ドイツの日本学では、3人しかいない日本人教授の1人で、1995年より6年間、副学長を務めた。

ハンブルク独日協会では、橋丸榮子氏が会長として活躍している。重光葵元外相の姪で、50数年の歴史をもつハンブルク独日協会で、日本人の会長は初めてだという。JDGYとは協力覚書を交換しており、昨春もハンブルクの「桜の女王」を案内して来日し、JDGYのメンバーと交歓した。



ハンブルク桜の女王と橋丸榮子氏、早瀬会長ご夫妻



『アメリカに渡った日本文化』
(2013年7月 淡交社刊)

文化コラム 2

海を渡った日本文化

－活躍する女性たち（その2）－

会員 寺澤 行忠

アメリカのサンフランシスコで、クリスティー・バートレット氏が茶道を教えている。

京都の裏千家で7年間修業したのち帰国した。裏千家はサンフランシスコにも茶室を持っている。和服を見事に着こなし、美しい日本語で、約100人の会員に厳しくまたやさしく指導する。非常に人気があり、入会するには1年待たなければならないという。



サンフランシスコ近郊、バークレイ在住のライザ・ダルビー氏は、作家、文化人類学者で、スタンフォード大学で博士号を取得した。日本で自ら1年間、芸者体験をした。著書に『紫式部物語－その恋と生涯』（光文社）などがある。



バーバラ・ルーシュ コロンビア大学名誉教授は、同大学のドナルド・キーン文化センターや中世日本研究所の所長を務めた。氏が日本の中世に関心を向けるきっかけになったのは、京都で13世紀につくられた無外如大（むがいによだい）禅尼の彫刻と出会ったことだったという。同研究所は、日本の宗教史における女性の役割を研究の大きな柱に据え、各方面から寄付金を募り、老朽著しい日本の尼僧寺院の保存修復運動に熱心に取り組んでいる。本来なら日本人がやらなければならない仕事である。2009年には東京芸術大学美術館で、「尼門跡寺院の世界」展を開催した。

近年は雅楽に魅せられ、日本から専門家を招いて、学問と実技の両面でコロンビア大学に雅楽を根付かせたいと張り切っている。

第1回南方楠方賞、山片蟠桃賞、日本政府から勲三等宝冠章などを受賞した。

パリで「エスパスハットリ・パリ日仏文化センター」を主宰し、日本文化の発信に活躍する服部祐子氏は、在仏50年、1993年に私財を投じ、同センターを設立した。1997年の「フランスにおける日本年」には、日本から宝生流の能や狂言、落語、講談、和太鼓などを呼んだ。フランス人の夫君の深い理解のもと、家具まで売ってその資金を調達したと、涙ながらに夫君への感謝を語る。

2003年にはユネスコとの共催で、「鯉のぼり・世界の子供の日」を企画した。国連が提唱する「世界の子供たちの平和文化と非暴力の国際10年」に、日本の

子供の日を重ね、鯉のぼりに平和のメッセージを託して行う平和交流イベントである。以後毎年5月に行われ、2009年には広島平和記念公園でも同時開催された。

イタリアのミラノでは、安藤圭子氏が日本の芸術、文化の紹介に活躍している。夫君で弁護士として活躍するマッシモ・メイ氏の全面的な協力で「ミラノ日本文化センター」を開設し、日本古典文学、禅、建築、庭園、絵画、工芸品などについて講義している。生け花のワークショップ、花道展、書道展、日本画展、日本映画観賞会、日本語教育、日本旅行の準備講座、琴の演奏、シンポジウムなどには、多数の参加者がある。

何事も二元対立でものを考え、知性に頼って生きようとすることで、精神的な生き詰まりを感じている西洋人に、それとは異なる解決の道があることを示唆する日本の文化が、西洋人に貢献できるものは大いにあると信じ、日本文化の紹介に夫妻で尽力している。東西の文化はそれぞれに素晴らしい、両者の融合は最高に素晴らしい、というのが夫妻の確信である。

* * * * *

文化コラム 3

海を渡った日本文化

ー日本美術のコレクターたち(1)ー

会員 寺澤 行忠

日本の美術品は、海外にも多く渡っている。それを流出として歎く声があるのは、まことにもっともであるが、一方でそれらの優れた美術品が、日本の美術に対する国際的な評価や関心を高める大きな契機となっているとする見方もある。

日本の美術品が海外に大量に渡るについては、しばしば日本美術を愛好する熱心なコレクターが介在している。

1913年、ケルンにヨーロッパ初の東洋美術館が設立された。それは東洋の芸術品が、西洋の芸術品と初めて対等に位置づけられたことを意味し、画期的なことであった。この美術館のコレクションは、アドルフ・フィッシャーとフリーダ・フィッシャー夫妻が日本で購入した美術品が核になっている。夫妻は数度にわたり日本を訪れて美術品を購入したが、殊に夫人の滞日は10年余りに及び、戦前この美術館の第2代館長を務めた。『明治日本美術紀行 ドイツ人女性美術史家の日記』（講談社学術文庫）という著作がある。



ケルン東洋美術館

パリのギメ東洋美術館は、実業家エミール・ギメのコレクションを基礎として、1879年にリヨンに設立され、1945年にルーブル美術館の東洋部の所蔵品と統合して、国立東洋美術館となった。ギメは世界各地を旅行して美術品を蒐集したが、1876年に日本を訪れ、仏教関係を中心に多くの美術品を購入した。「勢至菩薩金銅立像」は、法隆寺金堂の本尊阿弥陀仏の脇侍の一体で、日本にあれば重文級といわれる。日本庭園と茶室もつくられている。

わが国は1875年に、イタリア人、エドアルド・キョッソーネをお雇い外国人として招き、紙幣や切手の印刷技術を学んだ。一方でキョッソーネは、多くの日本美術品を系統的、広範囲に収集した。絵画、版画、武器や武具、陶磁器、漆器、仏像など、そのコレクションは全部で1万5千点を越えるが、中でも浮世絵が多い。死後彼の名を冠したキョッソーネ東洋美術館が、故郷であるイタリアのジェノヴァに開設された。彼は、紙幣や切手の印刷だけでなく、肖像版画の制作もよくし、殊に西郷隆盛や明治天皇などの肖像は、一般にも広く知られている。



エドアルド・キョッソーネ



実業家・松方幸次郎は、明治の元勳で首相や蔵相をつとめた松方正義の三男である。川崎造船所の初代社長で、造船で財をなした。彼が欧州で買い集めた1万点に及ぶといわれる美術作品群は、松方コレクションと呼ばれている。1918年にはフランスの宝石商・アンリ・ヴェヴェールから浮世絵8千点を購入している。明治初期の日本では、浮世絵は美術品扱いされず、大量にヨーロッパに渡っていたのである。彼の美術品の収集は、浮世絵を買い戻すとともに、西洋の本物を日本人に見せたいという思いからだったという。松方は文化のレベルが上がらないと、真の一線級のビジネスはできないと考えていた。

松方コレクションは、第二次大戦後、敵国財産としてフランスで接収されたが、コレクションを収蔵する美術館をつくるという条件で、日本に返還された。それがル・コルビュジェの基本設計になる国立西洋美術館である。モネの絵画やロダンの彫刻でも名高い。浮世絵の作品群は、皇室に寄贈され、現在は東京国立博物館に収蔵されている。

文化コラム 4 海を渡った日本文化 —日本美術のコレクターたち(2)—



会員 寺澤行忠

日本の美術品は海外に多く渡っているが、とりわけアメリカが多い。それは日本とアメリカが、それだけ関係が深かったからでもある。中でも多いのがボストン美術館である。

アーネスト・フェノロサ
アーネスト・フェノロサはお雇い外国人として 1878 年に来日、政治学や理財学を教える傍ら、日本美術に関心を持ち、その研究と作品の收拾に情熱を傾けた。岡倉天心とともに法隆寺夢殿を開扉させ、救世観音の存在を世に知らしめたことは、よく知られている。伝統的な芸術に対する評価がきわめて低かったこの時期に、その価値を日本人に再認識させた功績は、きわめて大きい。一方で「平治物語絵巻」「松島図屏風」など、すぐれた美術品 1000 点以上を購入、これをすべて買い取ったチャールズ・ウェルドが、自ら収集したコレクションと併せて、ボストン美術館に一括寄贈した。

岡倉天心は、ボストン美術館の第 2 代東洋部長に就任、フェノロサの感化もあり、日本美術の振興に尽力した。英文による著作“The Book of Tea”（『茶の本』）は、日本文化の優秀性を説いて、欧米の知識層に多大な影響を与えた。「聖観音立像」「弥勒菩薩立像」などは天心の収集した名品で、ボストン美術館の日本美術品の充実に大きく貢献した。

ウィリアム・ビゲローはモースの感化で来日、日本の文化や伝統を深く愛した。豊かな財力を背景に、多くの日本美術品を収集、約 4 千点の絵画と 3 万点以上の木版画をボストン美術館に寄贈した。この中には、約 700 点の肉筆浮世絵絵画が含まれている。これらは注文によって描かれた 1 点しかない特注品で、世界に比類のないコレクションである。

ウィリアム・S・スポルディングとジョン・T・スポルディングの兄弟は、浮世絵の歴史の全貌がつかめるようにすることを主眼に、浮世絵の最高の作品を厳選・網羅して、6 千点以上の浮世絵を収集した。そして作品を光線や湿度の害から守るために、美術館の中でも展示しないことを条件に、ボストン美術館に寄贈した。その条件は現在も守られているが、2007 年に NHK が特に撮影を許され、高精細カメラで撮影・放映した。現在我々が見る浮世絵のほとんどが退色しているが、このコレクションは、特に紫色が当時の色彩のまま鮮やかに保存されており、見るものを驚かせた。

ワシントンのフリーア美術館は、デトロイトの実業家、チャールズ・フリーアによって設立された。質の

高い東洋美術品 2 万 6 千点が、作品を美術館から外に出さないという条件で寄贈された。ほとんどがアジアの作品 1 千点から成るアーサー・M・サックラー・ギャラリーと地下で繋がっており、組織も共通で、ともにスミソニアン博物館群の一角を形成する。宗達の「松島図屏風」など日本美術品は約 5 千点あり、日本人のスタッフも数人いる。また日本語の美術関係書籍も、1 万冊余りある。

アメリカ・オクラホマ州の資産家に生れたジョー・プライスは、ニューヨークの古美術商でたまたま見かけた掛軸に心を奪われ、大学卒業祝いのメルセデス・ベンツを買うための資金で、その掛け軸を買ってしまった。伊藤若冲の「葡萄図」であった。このことが彼の人生を一変させた。

以来、画家の名前を見ずに、自分の眼だけで選ぶという信条のもと、若冲を中心に森狙仙、長沢蘆雪などの上方の画家、酒井抱一、鈴木其一などの江戸琳派の画家、肉筆浮世絵といった 600 点余りの作品を、日本人の悦子夫人とともに収集することになる。これらの画家たちが、ほとんど注目されていなかった時代のことである。そして日本から要請があれば、喜んでそのコレクションを日本に貸与した。今日の日本における若冲ブームは、彼の審美眼に負うところが大きいと言っても決して過言ではあるまい。



プライス夫妻

サンフランシスコのアジア美術館は、アジアの美術品だけを保有する美術館としては、西洋世界では最大規模であるが、実業家で元 IOC 会長のアヴェリー・ブランデーからサンフランシスコ市に寄贈された約 7 千点のコレクションから出発した。その後の収集で、現在は約 1 万 4 千点の美術品を所持しており、日本のものだけでも 5 千点近くに上るが、重文級を含むすぐれたコレクションのほとんどは、ブランデー・コレクションである。



文化コラム 5 海を渡った日本文化

— 桜の国際友好親善大使 —

理事 寺澤 行忠

桜は日本を象徴する花である。万葉の時代には、「花」といえば梅であったが、平安時代に入る頃から桜を指すようになった。桜は次第に増えて日本人に広く愛され、今では桜の季節になると、世界中から桜見物の観光客を集める時代になった。

明治に入ってから桜は、外国にも積極的に移植されるようになり、日本と外国を結ぶ国際友好親善大使の役割を立派に果たしている。



自由ハンザ都市
ハンブルクは、エルベ川河口から100キロ余り入った港湾都市である。1968年は明治100年に当たるといふことで、海外各

地で日本関連行事が行われたが、ハンブルクでもその一環として「桜まつり」が開催された。そしてハンブルク日本人会から363本の桜の苗木が寄贈され、アルスター湖畔のアルスター公園をはじめ、市内各所に植樹された。

この時、アルスター湖上で花火の打ち上げが行われ、これが好評で毎年欠かすことができない行事となった。同時に「桜の王女」（2015年に「桜の女王」に名称変更）を隔年に選出することも始まった。日本からの「桜の女王」と隔年に相互訪問していることは、ご承知のとおりである。



1977年には日独友好促進のために5千本の寄贈計画が立てられ、市内各所に植樹されて、2年後に目標を達成している。

桜が現地に住む日本人にとって、故郷を偲ぶよすがとなっていると同時に、日独親善、国際交流の力強い仲立ちの役割を果たしている。



イギリスに桜が普及する上で大きな功績があったのは、コリングウッド・イングラムである。1902年に来日し、「自然と人が族群の芸術的センスで調和している」日本に魅了され、すっかり日

本びいきになって、桜を収集するようになった。やがて100種類以上の桜園が自邸に誕生する。彼は何よりも多様な品種の桜を大切にしていた。1926年により珍しい品種を

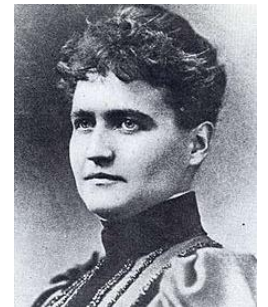


求めて来日した折には、交配種であるソメイヨシノの急激な増加の蔭に、多くの自生種が絶滅の危機にあることを知り、それらの苗をイギリスに送らせた。実際その後、日本で絶滅したとみられる「太白（たいはく）」という品種を、日本に里帰りさせている。

彼は時折桜園を公開し、一般の人を花見に招待した。日本の桜は、彼の桜園からイギリス各地へ広まっていった。現在イギリスで多種多様な桜が見られるのは、イングラムのお蔭とあってよい。そしていま、英国日本人会の提唱で、日本で寄付金を募り、1千本の桜をイギリスに寄贈する計画が進んでいる。

なお、このイングラムの事蹟を日本に紹介したのは、元毎日新聞記者でロンドン在住の阿部菜穂子氏で（『チェリー・イングラム—日本の桜を救ったイギリス人—』岩波書店刊、2016年3月）、この本のことは磯貝喜兵衛理事よりご教示いただいた。

海を渡った桜と聞いてまず頭に思い浮かぶのは、ワシントンのポトマック河畔の桜であろう。19世紀末に雑誌記者・作家として日本に滞在したエライザ・シドモアは、桜の美しさに魅せられ、帰国後アメリカへの移植について、政府に熱心に陳情した。その情熱が当時のタフト大統領夫人を動かし、大統領夫人の要望で、1912年に尾崎行雄東京市長が、アメリカへ桜を贈ることになった。アメリカ在住の高峰讓吉なども、側面から協力した。



エライザ・シドモア

日本から届いた約6千本の苗木のうち、半数がワシ



ントンのポトマック河畔に、残りの半数がニューヨークのセントラルパークとクレアモントパークに移植された。アメリカはその返礼として、

ハナミズキを日本に贈っている。1949年以降、毎年桜の開花の時期に合わせて、ワシントンで盛大な桜祭りが行われる。大統領夫人の植樹式で始まるこの行事は、さまざまな日本文化の紹介行事、「さくらの女王」の選出、パレードなどが行われ、アメリカのみならず世界中から約100万人の人々を集めるイベントになっている。

2012年には100周年を迎え、ひとときわ盛大な桜祭りが行われた。100周年を機に、全米各地に桜を植える計画が着々と進んでいる。

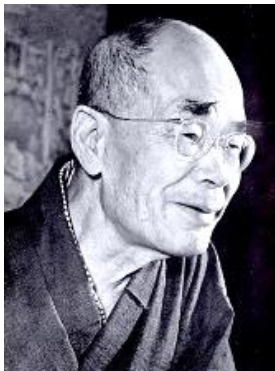
海を渡った禅

理事・文化委員長 寺澤 行忠



アップルの創業者、スティーブ・ジョブズが禅に傾倒していたことは、広く知られている。若き日に後述する鈴木俊隆の著作に感銘を受け、鈴木俊隆がアメリカに招いた禅僧乙川弘文に約30年間師事した。

できるだけ無駄を排し、シンプルでエレガントな美しさを追求するジョブズのものづくり精神の背後には、禅の哲学があるとみられている。また彼は日本の新版画（明治以後に作製された木版画）の熱心なコレクターでもあるが、そのモノクロームな美への志向は、やはり禅に対する志向から来ているものであろう。



この禅を海外に広めるきっかけを作ったのは、鈴木大拙（すずき だいせつ）である。1897年に渡米して以来、日本と欧米を往来しながら、仏教の西洋への紹介に力を尽くした。西洋に多くの学ぶべきものがあるが、東洋にも西洋に紹介すべきものが多々あり、ことにそれは宗教と哲学だというのが信条で、英語で精力的に紹介活動を行った。

約100冊に及ぶ著書のうち、約4分の1が英語で書かれている。中でも英文で書かれた『禅と日本文化』が欧米の読者に与えた影響は、きわめて大きかった。特に知識層に浸透し、大きな尊敬を受けている。大拙は1950年から58年にかけてアメリカに住み、ハワイ大学、ハーバード大学、イエール大学、プリンストン大学などで講演、またコロンビア大学では客員教授をつとめ、多くの聴講者に深い感銘を与えた。ハワイ大学のチャールズ・ムーア教授は大拙の功績について、「世界の人々の相互理解、ことに東洋と西洋の人々の相互理解に対する貢献こそ、誠に絶大なものであった」と述べている。

鈴木大拙は金沢の出身で、のちに上京して早大、東大に学ぶが、金沢時代の旧友に、後に哲学者となる西田幾多郎、実業家となる安宅弥吉がいた。西田は鈴木『禅と日本文化』の序文に、「君は最もえらい人でなくて、最もえらい人かも知れない。私は思想上、君に負うところが多い」という言葉を寄せている。安宅弥吉は後に10大商社の一角に加えられる安宅産業を興したが、鈴木に「お前は学問をやれ、俺は金もうけをして、君を食わし

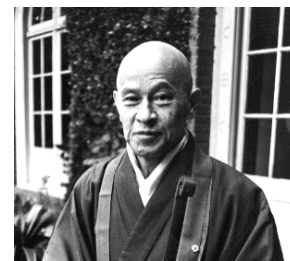


てやる」と約束した。この約束が実って、鎌倉東慶寺の一角にある財団法人松ヶ岡文庫となった。

大拙はアメリカと日本の間を往還しつつ、日本では東大講師、学習院や大谷大学の教授を務めた。1949年には学士院会員に推され、文化勲章を受けた。分析心理学で知られるカール・ユングと親交があり、民芸の柳宗悦や松方コレクションの松方三郎などは教え子、ハイデッカーなどとも知友であった。ノーベル賞候補になったこともある。

アメリカでは、大拙が禅を説いた1950年代、サンフランシスコにはビート族が多かった。このビート族がまず禅を受け入れ、そこからアメリカにおける禅が広がっていくのである。その運動の核になったのが、サンフランシスコ郊外のカリフォルニア大学バークレイ校であった。

大拙に触発されてアメリカに渡った禅の指導者の一人が鈴木俊隆（すずき しゅんりゅう）である。彼の指導によって禅はアメリカに浸透する。彼は今、アメリカの道元とも呼ばれており、その著作“Zen Mind, Beginner's Mind”は、禅を学ぶ者のバイブルになっている。アメリカには、約200の禅センターがあり、禅の修行者は数千人いるといわれている。



ヨーロッパでは1967年に弟子丸泰仙（でしまる たいせん）がフランスに渡り、ヨーロッパに禅ブームを巻き起こした。曹洞宗のヨーロッパ開教総監として、5か寺、110の道場を統括し、20万人に及ぶ弟子を育てた。

ドイツには、弟子丸泰仙から指導を受けたテンプロイ天龍・ドイツ禅協会会長のような人もいれば、日本で修業し、ドイツに渡って禅を指導する中川正壽・アイゼンブッフ普門寺堂塔のような人もいる。中川氏は、仏教や禅を布教する上で、ヨーロッパ文明の基礎となっているキリスト教徒との交流は不可欠との認識で、折あるごとに交流を図っている。



日本で禅僧として活躍しているドイツ人に、以前JDGYで講演していただいた石川県総持寺のゲツペルト昭元氏や、10数冊の日本語による著書があり、マスコミでも著名なネルケ無方氏などがいる。

海を渡った俳句

常務理事 寺澤 行忠

俳句は 20 世紀に入るところから、駐日外交官やいわゆるお雇い外国人教師たちによって、海外に紹介された。

俳句が海外に紹介された当初は、必ずしもすぐれた文芸として紹介されたのではなかった。イギリスの外交官、W・G・アストンは、1872 年に発表した著書の中で、俳句について、17 音という短い韻文では、詩の名に値するものを包含できないと言っている。

いわゆるお雇い外国人として東大で教鞭をとったドイツ人文学者、カール・フローレンツは、「短歌はただの詩的格言か、あるいは詩句の片碎に過ぎずして、ほとんど詩を成さざるものなり」と述べている。

詩は一定の長さがなければ、何も伝えることができない、というのがアストンやフローレンツの考え方であった。それがヨーロッパ文学の伝統的な見方であった。この時代、西洋絶対優位の立場から、あらゆる価値判断の基準は西洋にあるという彼らの確信に揺るぎはなかった。

俳句が西洋に普及する上で、もっとも大きな役割を果たしたのは、フランス人のポール・ルイ・クーシューである。彼は 1903 年に来日して俳句を知り傾倒、日本やアジアの文化は西洋文化と対等の価値を有し、互いに学びあわねばならないとの基本的認識から、日本文化や俳句に対し、敬意と愛情に満ちた解説・論評を行った。帰国後、フランス語でハイカイをつくり、1905 年に句集を出版した。これは世界で最初の外国人による句集であった。



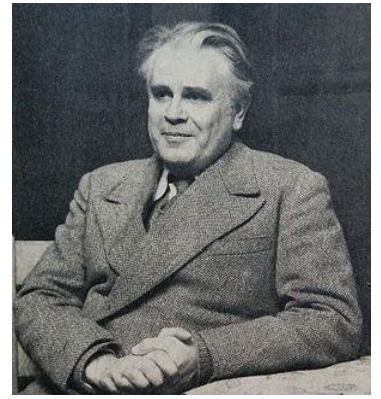
(グンデルト夫妻)

ドイツではヴィルヘルム・グンデルトが、1906 年に宣教師として来日、活動しているうちに日本文化に深い関心を寄せるようになり、1929 年に著した日本文学に関する著書で、フローレンツとは逆に、俳人はわずか 17 文字で、1 冊の本に匹敵するほどの詩的世界を描き出すと述べている。彼は後にハンブルク大学の日文学教授となり、さらに総長に就任した。従弟に作家ヘルマン・ヘッセがおり、ヘッセも俳句と禅を称賛している。

アメリカで一般の人々の俳句に対する関心が高まってくるのは、第二次世界大戦後のことである。鈴木大拙は、俳句の本質を禅の精神と結びつけて説いた。すなわち俳句を理解することは、禅の「悟り体験」と接触する

ことだとする。そしてそれに呼応するかのようになり、俳句の優れた入門書が、次々に出版されるようになった。

イギリス人、レジナルド・ブライスは、1949 年から 52 年にかけて“Haiku” 4 巻を刊行している。この中で俳句約 3,000 句が英訳され、



(レジナルド・ブライス)

アメリカで広く読まれると同時に、実作上のよき手本となった。彼はロンドン大学を卒業後日本政府に招かれ、京城帝国大学で教鞭をとり、戦後学習院大学教授となった。

彼は俳句という文芸に心酔し、1954 年には俳句研究で東大から博士号を授与されている。日本語で俳句を理解し、鑑賞することができたのである。また鈴木大拙を師と仰ぎ、禅の修行にも長年打ち込んだ。そして禅と俳句はほとんど同義語であり、俳句は禅の境地から理解されなければならないと述べている。彼は多数の英文による著作によって、日本文化や禅を海外に紹介した。日本を心から愛したブライスは、「山茶花（さざんか）に心残して旅立ちぬ」という辞世の句を残して、いま鎌倉東慶寺の鈴木大拙の墓の傍に眠っている。

禅と結びついた俳句は、まず 1950 年代にサンフランシスコのビート族に受け入れられ、彼らを介して一般の人々の間に浸透していくことになる。

そうした傾向をさらに推し進めたのが、コロンビア大学教授であったハロルド・ヘンダーソンで、その著『俳句入門』には俳句 381 句が英訳され、20 万部売れたという。1968 年にはアメリカ俳句協会が設立され、約 900 人の会員がいる。

1970 年代になると、ドイツでも俳句が一般に普及する兆しを見せるようになり、ドイツ語による句集が出版されている。1988 年にはドイツ俳句協会が設立された。



(ヘッセとグンデルト)

いま俳句は世界各地に広まり、それぞれの国の言語で、世界 50 か国、100 万人の人々によってつくられている。季語がなくてもよいし、5・7・5 の形式も踏まないが、それらが日本の俳句から生まれたものであることは間違いない。東西文化の新しい融合のかたちとして、今後のさらなる発展が期待されるのである。

海外に日本文化を紹介した人々

常務理事 寺澤 行忠

本コラムでは、これまでに日本文化を海外に紹介した人々を、いくつかのテーマのもとに多数扱ってきたが、ここではこれまでに扱わなかった人々を取り上げてみたい。

日本文化を早い時期に海外に紹介したのは、ドイツ人、**エンゲルベルト・ケンペル**である。彼は1690年に長崎のオランダ商館付の医師として来日したが、持ち前の旺盛な好奇心で、日本の実情を詳しく観察し、研究した。その成果は『日本誌』として刊行され、この著作が以後のヨーロッパ人の日本観に、きわめて大きな影響を与えた。モンテスキュー、ヴォルテール、レッシング、カント、デイドロなどの著作にも、その影響がみられる。



シーボルト

ケンペルが日本を去って約130年後、やはりオランダ商館の医官として来日したのが、ドイツ人、**フィリップ・フランツ・フォン・シーボルト**である。医師として日本人を診療し、彼のもとに集まってくる門人たちに最新の西洋医学、西洋科学を教授するとともに、植物学、動物学、鉱物学などの調査研究にも力を注いだ。帰国に際し、禁制品の地図を国外に持ち出そうとしたことが発覚し、国外追放処分となった。いわゆるシーボルト事件である。



帰国後、“Nippon”『日本』が刊行され、それによって日本の地理、歴史、宗教、政治、経済など諸分野が、“Fauna Japonica”『日本動物誌』、“Flora Japonica”『日本植物誌』によって、日本の動植物多数がヨーロッパに紹介された。また日本人女性楠本其扇（お滝）と結婚し、アジサイに妻の名にちなみ「オタクサ」と命名している。

日本で精力的に収集した4,700点余りに上る彼のコレクションはオランダが購入し、これがライデン国立博物館の基礎になった。

その後シーボルトの追放令は解除され、1859年に再び来日した。この時も日本コレクションの収集に力を入れ、約6,000点に上るコレクションを収集、これがミュンヘン五大陸博物館（旧ミュンヘン国立民族学博物館）の基礎を築くことになった。

エルヴィン・ベルツはいわゆるお雇い外国人として1876年来日、東京大学で医学を教え、日本の医学の発展

に多大な貢献をした。その傍ら、日本美術にも関心を持ち、膨大な数の美術品を購入した。美術品のみならず、陶器、漆器、工芸品、織物、武具等多岐にわたる約6,000点に及ぶベルツのコレクションは、いまリンデン博物館に所蔵されて、同館の日本美術コレクションの中核をなしている。



エドワード・モース

アメリカ人では、明治初年に**エドワード・モース**がお雇い外国人として来日、東大で動物学を講じた。大森貝塚を発見したことで知られるが、彼は江戸・明治初期の庶民文化を深く愛し、約5,000点の陶磁器と大量の民俗資料を収集した。後に陶磁器はボストン美術館に、それ以外の民俗資料などはボストン郊外、セーラムにあるピーボディー・エセックス博物館に売却された。

このモースのコレクションは、19世紀の日本でつくられたあらゆる種類の陶磁器をすべて網羅している点で、他に見られない特色を持っている。シーボルト・コレクションと共に、在外日本コレクションを代表するものとなっている。

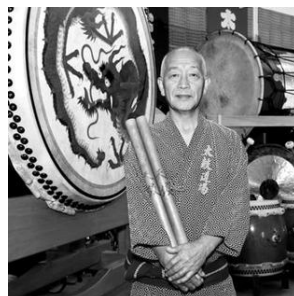


千玄室大宗匠

茶道の裏千家・千玄室大宗匠も、世界に茶道を紹介する上で、大きな役割を果たした。

「一盤（ワン）からピースフルネスを」を理念として、海外に約40か国、110余か所に拠点をつくった。海外の登録会員は5,000-10,000人、それ以外に未登録で稽古している者が2-3万人いるという。

ミュンヘンの広大なイギリス公園には、ミュンヘンオリンピックの際に裏千家から寄贈された立派な茶室があり、イギリス公園の中でも最も人気のある名所の一つとなっている。



田中誠一氏

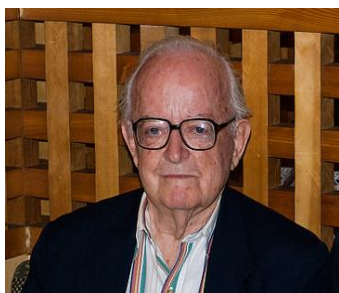
和太鼓がアメリカで普及するについては、**田中誠一氏**の尽力によるところが大きい。田中氏は1967年に渡米して活動を開始、サンフランシスコに太鼓道場を創設した後も、何度も日本に帰って、日本各地の有名な太鼓の師匠について修業を積み、技術を磨いた。それから半世紀余りを経て、いまアメリカには約400の太鼓グループがあるが、そのほとんどは田中氏の門下生で、氏に多少でも手ほどきを受けた人の数は、1万5千人を超えるという。

太鼓を通じて、日米文化交流に果たした役割は大きい。

海を渡った日本文学

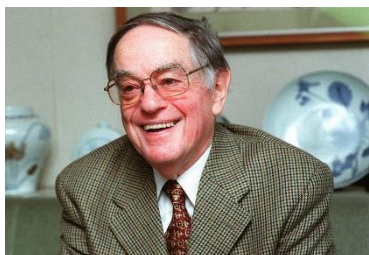
常務理事 寺澤 行忠

日本文学を海外に紹介した功労者としては、エドワード・サイデンステッカーとドナルド・キーンをまず挙げなければならないであろう。日本の文学がローカル文学から世界文学になる上で、両氏が果たした役割は、きわめて大きかった。



エドワード・サイデンステッカーは、1921年に生れた。海軍日本語学校で日本語を学び、コロンビア大学で角田柳作の指導を受けた。スタンフォード大学やコロンビア大学で日本文学を教えたが、

多数の翻訳や研究書により日本文学を世界に紹介し、日本文学の国際的な評価を高めることに貢献した。『源氏物語』の翻訳はことに名高い。また川端康成の『雪国』の名訳は、川端のノーベル賞受賞に大きく貢献した。



ドナルド・キーンは、1922年に生まれ、サイデンステッカーと同様、海軍日本語学校やコロンビア大学に学び、角田柳作の指導を受けた。日本に関心を持ったの

は、アーサー・ウェーリー訳の『源氏物語』に感動したことだったという。研究対象は、古典文学、現代文学のみならず、文化、演劇、歴史その他、きわめて幅広い。日本語による著作が約30点、英語によるものが約25点あり、これらの多数の著作や翻訳によって、日本の文学や文化を海外に紹介した。2008年には外国人としては初めて文化勲章を受章、2012年には日本国籍を取得した。2013年には新潟県柏崎市に「ドナルド・キーンセンター柏崎」が開設された。

今や日本の文学は、世界中で読まれるようになった。国際交流基金は、ウェブサイトで「日本文学翻訳書誌索引」を公表している。まだ十分に調査が尽くされていないということであるが、これによって日本の作家の作品が、どのような外国語に翻訳、出版されているか、およその傾向を知ることができる。

それによってみると、最も翻訳出版数が多いのが村上春樹であり、次いで川端康成、さらに芥川龍之介と続く。この3人は1,000点を超える。長らく川端康成が首位にあったが、最近現役作家である村上春樹が追い抜いた。これらに続くのが三島由紀夫、谷崎潤一郎、宮沢賢治な

どである。もっともこれは作品単位の統計であるから、短編作家の数字が多く出る傾向がある。芥川の数字が多いのは、そうした理由もある。



村上春樹の人気は抜群である。翻訳言語が50を超えている。ハーバード大学の書店でも、村上ものが20年も前から書棚のワンブロックを占め続けており、カリフォルニア大学バークレイ校で行なわれた講演会では、定員2,000人の会場に入りきれない人が出たという。ジョージタウン大学ではある年、村上の『神の子供たちはみな踊る』が、新入生全員の必読書に指定された。

なぜこれほど村上が人気があるのか。世界文学に詳しい沼野充義氏は「村上文学の特質を一言でいえば、日本的なものとの西洋的なものとの絶妙なブレンドで、そのブレンドの仕方が天才的だ」と言われている。少なくとも、日本的なものを主張する作家ではない。

ヨーロッパで最初に翻訳された日本文学の作品は、柳亭種彦の『浮世形六枚屏風』である。開国前の1847年に、A・プフィッツマイヤーによってドイツ語訳され、ウイーンで出版された。

ドイツでは芥川龍之介の翻訳出版点数が最も多く、次いで村上春樹、川端康成、井上靖、三島由紀夫、大江健三郎などの作品である。芥川と村上は、100点を超える。ほとんどの作家の英語訳の出版点数がドイツ語訳のそれを上回る中で、井上靖はドイツ語訳の数が英語訳の数より多く、ドイツ人好みの作家と言えるかもしれない。

古典では『源氏物語』が、世界で読まれる時代になった。国文学研究資料館の調査によれば、現在『源氏物語』は、英語、ドイツ語、フランス語はもとより、イタリア語、中国語、スペイン語、ロシア語、ポルトガル語など、32の言語に翻訳されている。ドイツ語訳は、ハンブルク大学のオスカー・ベンル教授の訳が、原文に最も忠実で、表現も優れているとして名訳の定評がある。

『源氏物語』は千年の時を経て、今や読者は世界中に広がり、世界の古典としての地位を確固たるものにしていく。



国宝源氏物語絵巻・東屋・徳川美術館蔵